

新シリーズ 『ピアノ音楽の楽しみ方』 (5)

” 名曲の名演奏を聴き比べながら、ピアノ音楽の歴史を学ぼう！”

〈第五回〉 シューベルトのピアノ音楽におけるロマン性と
その表現形式

ロマン派の開祖シューベルトは
師ベートーヴェンが確立した
ソナタ形式で自身のロマンを
表現しようとした！

従来の西洋音楽史では古典主義を完成させたベートーヴェンに対して、ロマン派の開祖はシューベルトという見方が常識だったが、今ではむしろ古典派音楽の完成者ベートーヴェンの中にいち早くロマン的要素を見いだしてその芽を大きく発展させたのがシューベルトという見方が一般的。つまりこの二人の天才は敵対する関係ではなく底辺において深く結びついていたのである。

ベートーヴェンを心から尊敬し1827年、彼の葬式には終始号泣しながら行列の末端に加わったシュー

ーベルトもその後を追うように翌28年、僅か31歳の若さであの世へと旅立ってしまうが、今回はこの最後の年の傑作であるピアノソナタ21番変口長調と1822年に作曲された名作「さすらい人幻想曲」ハ長調(「幻想曲」という名称であるが実際は4楽章から成るピアノソナタ)の二作品を取り上げシューベルトがいかにベートーヴェンの様式に固執しながら自身のロマンを表現しようとしたかを考察してみたい。シューマン、ショパン、リストなどシューベルトに続くロマン派の巨匠たちはいち早くソナタ形式から離れ、主流を小品中心へと指向していった……。

ソナタ第21番ではつい最近3回目の新録音を出したアフアナシエフを中心にホロヴィッツ、ハスキル、リヒテル、ゼルキン(何れも数種の録音あり)を「さすらい人」ではポリーニを中心にリヒテル、ケンプを夫々聴き比べてみたい。どうかお楽しみに！

日 時 / 6月28日(日) 13:30~15:45

場 所 / 久寺家近隣センター 多目的ホール

発表者 / 高橋 敏郎 シリーズ 全10回(予定)

参加自由・入場無料

問い合わせ / 04-7184-3771 佐藤 <http://www.aafc.jp/>